円測の『解深密経疏』における八識説について

徐　　徳　仙

円測（613—696）の『解深密経疏』十巻は知られているように漢文とチベット訳が現存する（但し，漢文は第八の巻頭部分と第十巻の全部を欠いている）。この『解深密経疏』の心意識相品の中には真諦の九識説に対する円測の批判が見られるので，今回はその一部分について述べて見る。

円測は「真諦の九識説の中，眼等の六識までは他の識論と同じであるから問題はないが，第七・八・九識は多くの誤りがある」と批判する。円測が真諦の説と云われる第七阿陀那識について見ると「第七阿陀那，此れを執持と云う。第八を執持して我・我所と為す」と説いている。その説について円測は「阿陀那は第八識の異名にして第七に非ず」といって真諦の説を批判している。

まず，その問題としている真諦の「第七阿陀那」という阿陀那とは，如何なる意味をもっているのかを知る為に「真諦は『決定蔵論』によりて九識説を立てる」と云われている『決定蔵論』を探って見ても「阿陀那」という名は見当たらない。しかし「阿陀那，此云執持」と云う「執持」については，「若し此の識を離れば，根が執持を有すること実に此の理無きなりと，云々」と説かれている。『決定蔵論』は『瑜伽論』摂決択分の異訳であることは既に研究されているので，それの『瑜伽論』の箇所を見ると「若し阿頼那識，無くんば，依止の執受することは道理に応ぜず」と説かれている。

比較すると，『決定蔵論』の「此の識」が『瑜伽論』には『阿頼那識』となっているし，「根が執持を有すること」とは「依止を執受すること」となっている。「執持を有すること」即ち「依止の執受」とは，輪廻の主体を維持する阿羅耶識の性質の説明であって，執持は執受と同じに解釈せられている。

その執受について『解深密経』には「一切有情の身分生起は二の執受によって成熟し展転和合し増長広大する」と説かれている。『摂大乗論』には「阿梨耶識が身を執持するということ，この五根を執持しているという意味に於いて阿陀那（執持）識と呼ばれる。即ち阿陀那とは身を取ることの依止という意味」と説いている。

以上で，真諦の云う「第七阿陀那」は「執持識」であることがわかったが，それについて円測は「阿陀那は第八阿頼耶識の異名にして第七に非ず」と云って『解深密経』等をその論拠にして反論している。それは『解深密経』を訳した玄奘の八識別体説の立場から見ると，真諦が「第七阿陀耶」というときの「第七」と「阿陀那」とはそれぞれ問題になるが，しかし，真諦訳の他の論書には，阿梨耶識の異名として，色根を執持するという意味の阿陀那識と，第八識を対象として我・我所として執着するという意味の阿陀那識との二つの用例がある。これについて名称は同じでもその指示する対象は別であるという考え方と，名称が同じであるから指示する対象も同じであるという考え方がある。どちらも理由があるが，真諦が第七識に対してわざわざ阿陀那識という名称を用いたのであるから，これは第七識と第八識には通じる面があることを示唆していると受け取られるものであろうと思われる。

次は，真諦説の第八阿梨耶識のことである。それには解性梨耶と果報梨耶と染汚梨耶との三種が説かれるが，今回は円測が問題にしている果報梨耶について論ずる。

円測が真諦の説として「果報梨耶は十八界を縁じる」と云って，その論拠として『中辺分別論』を引用している。それについて，円測は「第八梨耶は十八界を縁ずること有り得ない」と反論し，その論拠として『弁中辺論』を引用している。同じ偈頌について，真諦・玄奘の両訳の相違は大きいので，その偈頌の梵本を見ると次の如く説いている。

artha-sattvātma-vijñapti-pratibhāsaṃ prajāyate|
vijñānaṃ nāsti cāsyārthas tad-abhāvāt tad apy asat||
「境と有情と我と了別として顕現する識が生じる。しかし，そこには境は存在しない。それ〔境〕が存在しないから，それ〔識〕もまた存在しない。（第一章第三偈）」

この偈頌は虚妄分別の自相を説くものである。すなわち，虚妄分別（阿頼耶識）が諸法を造る働きの状態を次の四種の相にまとめている。即ち境（artha）と有情（sattva）と我（ātman）と了別（vijñapti）との四種である。偈の梵文を両漢訳と比較対照すると「artha」を真諦は塵，玄奘は義，「sattva」を真諦は根，玄奘は有情，「ātman」を真諦は我，玄奘も我，「vijñapti」を真奘は識，玄奘は了，「vijñāna」を真諦は本識，玄奘は識と訳している。これを見ると，恐らく玄奘訳の方が原文に忠実な訳と見られるが，両訳の間の大きな相違は玄奘訳には直接，阿頼耶識（第八識）の言葉が出ていないのに対し，真諦訳では「本識」の言葉によっ

て阿梨耶識を出していることである。しかし，玄奘訳の世親釈に阿梨耶識の言葉はないが，この所説に阿頼耶識が意味されているであろうことは「安慧の復註(Madhyānta-vibhaṅga-ṭīkā)」によって分かる。それを見ると，

「その中，外境と有情として顕現する阿頼耶識は相応を具するもの，而してそれは異熟の故に無記なり，我としての顕現は相応を具する染汚の意なり。云々」

と訳している。

唯識説の形式的な学説については一般に護法・安慧・玄奘訳の学説が彌勒・無著・世親の古唯識説に忠実であって，真諦訳が特異であることが多いが，この場合も安慧の説は古唯識説に忠実なもので玄奘訳の思想と一致すると見てよいであろう。この安慧の復註の趣意を図示すると次のようになる。

「artha・境」と「sattva・有情」としての顕現は…阿頼耶識

「ātman・我」としての顕現は…染汚意

「了別（vijñapti)」としての顕現は…六識となっている。

以上に於いて外境と有情の顕現となるのは阿頼耶識の表象対象（所縁）が六境の器世間・身体（有根身）等の物質的なものであることを意味するものである。即ち，この偈は八識説の体系を述べたものであって，阿頼耶識の表象対象が十八界であることを意味するのでないと理解される。これに対して真諦訳では「塵と根と我と及び識とは本識生じて彼に似る」という。即ち阿梨耶識が六境（塵）・六根（有情）・意識（玄奘訳の染汚意＝末那識）・六識を表象するという趣意を表明している。即ち，阿梨耶識の表象対象は十八界であるということになる。

以上，円測の『解深密経疏』における問題点として，円測が真諦の説としていう第七阿陀那識と第八阿梨耶識である果報梨耶についての一部分を論じて見た。今回は第九阿摩羅識説についてふれなかったが，円測は八識説を認めて真諦の九識説について批判している。その批判の論拠のほとんどは法相唯識の立場からのもののようである。円測の学説は法相唯識にあるように思われるが，その点，さらに研究を進めたいと思う。

〈注略〉

〈キーワード〉　円測の『解深密経疏』，阿陀那識

（立正大学大学院）